



# THE NEWS TOKYO NODAI

## 東京農業大学

世田谷キャンパス 大学本部/大学院・応用生物科学部  
地域環境科学部・国際食料情報学部・短期大学部  
厚木キャンパス/大学院・農学部  
オホーツクキャンパス/大学院・生物産業学部

編集/東京農業大学学長室  
発行/東京農業大学出版会  
〒156-8502 東京都世田谷区桜丘 1-1-1

## 「生きる」を支える東京農大

学長 高野克己



入学おめでとう。東京農大は皆さんの未来への扉です。ドアノブを握り、扉の向こうにあるまだ見ぬ景色を想像してください。皆さんは、これから来る未来を創ることを期待されています。約1万年前、人類が食料を自らの手で生産する農業がスタートしました。野生植物から作物を、野生動物から家畜を育種し、人類社会の中で食物連鎖を実現

現しました。しかし、他の生き物の命の基に人類が生きていることに、何ら変わりはありません。1万年前に農業の扉を開けた人類は、今の社会を想像出来た訳はありません。その一瞬一瞬を生きた人々の思いが今の社会を作り上げ、我々はその恩恵を享受しています。農業を科学技術として支える農業は、生命、食料、環境、健康、エネルギー、地域と地方創成などその領域は拡大しています。25年後には世界人口は現在の72億人から90億人に達することが予想され、我々の前には自然の破壊、野生生物の減少、食料危機、農耕地の荒廃、自然災害、都市人口の増加、食の安全、健康、生活環境の劣化、心と社会の不安など地球と人類が抱える大きな問題が待ち受けています。これらの解決は人類の生きると自然との共生を考案する農業が立ち向かい解決すべき課題です。

人類、自然、社会の「生きる」を支える東京農大の教育研究に大きな誇りを持つ、人の心を慮ることのできる強くて優しい人物に育ってください。

## ミス日本みどりの女神

第47回ミス日本コンテスト2015で、佐野加奈さん(食料環境経済学科4年・写真)が初代のミス日本「みどりの女神」に選ばれた。また農林水産省から「みどりの広報大使」にも任命され、今後さまざまな活動を行っていく。



「みどりの女神」は、みどりや木々とのふれあいや活用を通じて、そのだ知識を生かせると思っています。審査の中で、自分らしさを表現する難しさを感じましたが、東京農大での経験で乗り越えることができました。2年時に参加した一

## 「みどりの広報大使」

食料環境経済学科の講義の中で、農村地域再生における「若者の力」の必要性に感銘を受けました。また、これまで「森林を守る」とは「木を使わないこと」だと解釈していましたが、林業を輸入に頼るのではなく、国産の木を使い、新たな

週間の農業実習で農家の方々の思いや苦勞を肌で感じ、愛情ある女性になりたいという理想を持つことができたことも良いアピールにつながったと思います。

親しみを広める役割を担う賞で、東京農大で学んだ知識を生かせると思っています。審査の中で、自分らしさを表現する難しさを感じましたが、東京農大での経験で乗り越えることができました。2年時に参加した一

苗を育てていく循環こそが日本の森林を守る上で重要なことなのだと思えました。あらゆる生命の根源である森林を守ることは日本の文化を守ることにつながるという思いを伝えていきたいです。

## トビタテ！留学 いざ東京農大から世界へ

グローバル化が加速する中、文部科学省が意欲と能力ある若者を海外留学に自ら一步踏み出す機会を醸成することを目的に行っている留学促進プログラム「トビタテ！留学 JAPAN」。当企画により本学から世界へ飛び立った学生を紹介する。本学にはオリジナルの留学コースや海外実習などもあり、海外に関する情報のアンテナを日頃から張り積極的に活動してほしい。留学に関する事務窓口は「国際協力センター」。

## 寄稿 細越 雄太さん 国際農業開発学科 H27卒



大学1年時に海外に行った際、自国の農業も説明できず、知識や経験不足を痛感した。その悔しさから「日本と海外の農業を学び、発展途上国へ行く」という目標を立て動いた結果、日米通算で785日の農業実習で経験を得ることができた。卒業後に途上国へ行こうと計画していたところ、本制度を知り応募した。本留学では4カ国での調査を目的とし、内容はベトナムでは「ベトナム戦争時に使用された枯葉剤とベトナムの農家の化学農薬等に対するオーガニック農家を主とした意識調査」、タンザニアでは「伝統的農法とオーガニック農法の差異」、フランスでは「社会福祉的役割を持ったコミュニティ

タイガーデンプロジェク トへの参加」、アメリカでは「オーガニックレストラン・シェ・パニースと自社農場へのインターンシップ」である。海外では「英語が使えれば世界中どこへ行っても大丈夫」という言葉を信じていたが、やはり現地の言葉や文化を重んじることが大切だと実感。しかし、ベトナム、タンザニアの農村部で通訳無しでファームステイをし

たが、言葉が話せなくても、むしろその状況を楽しめるようになった。フランスでは他国の留学生達と討論会をする機会があり、自分の英語は下手であったが皆はしっかりと耳を傾けてくれた。これまでを振り返り一つ後悔を挙げると、私自身の初海外留学が大学3年生であったこと。留学から得たものは言葉に出来ないほど大きく、もし大学1、2年生の時に留学していたら、良い方向でさらに違った価値観を得ていたことが容易に想像できる。

留学への不安・緊張は沢山あると思うが、自分はいっそうこう考える。「緊張の度合いが強ければ強いほど、その先に待っているワクワクは大きい」(写真はタンザニア・ファームステイにて)

## Run for 地方創生！ 網走マラソン 学生の手で



9月27日「第1回オホーツク網走マラソン」が開催される。水谷洋一市長就任時から取り組んだ念願のマラソンだ。

この大会にはオホーツクキャンパスの学生が地域密着体験型プログラムとして企画段階から参画する。コースに

設置されている20カ所の給水ポイントではチーム別に企画したおもてなしでランナーの心と体をサポート。学生が地域と一体となった取り組みに積極的に参加し、多くの方々とコミュニケーションを図り「共創・共育・共感」を重ねることで人間力を高める。次年度以降はリーダー役として、さらには新たな地域の取り組みに積極的に参画し、地域創生のリーダーを養成することが狙いである。

網走刑務所前をスタートし、フィニッシュでは「うみ」と「大地」の収穫祭が開催される大曲湖畔園地18haの壮大なひまわり畑(写真)がゴールランナーを迎える。

(オホーツク事務部)

# 入学おめでとう！ 学生部長からのメッセージ

## 人との出会いを大切に

世田谷キャンパス学生部長 金子忠一



新入生の皆さんは、世田谷キャンパスの地に、未来の夢と希望を包んだ蕾を芽ぐんだところで、これから大学生活では、講義や実習・演習を通して専門的な知識や技術について学ぶや研究に取り組むとともに、研究室での活動、農友会の各部や同好会での活動、収穫祭の企画・運営など、さまざまな機会を通して多くの人と出会い、多くの人との出会いがあるでしょう。ぜひとも、こうしたチャンスに積極的に挑戦していただき、多くのことを学び、体験し、感じてほしいと思います。それぞれの思いも、将来の目標もさまざまであって、みなさんの多彩な輝きが東京農大の魅力でもあります。多様な価値観があることを大切に、自己と他者を共に尊重しつつ、大学生として、社会人として、自立心をもち、キャンパスライフ

## 食べることは農業的行為

厚木キャンパス学生部長 馬場 正



厚木キャンパスへようこそ。大学入学を機に新しい生活が始まったことでしょうか。昔から衣食住というように食生活は生活の真ん中にあります。ぜひ食べることにこだわって新生活を楽しんでください。

表題は、アメリカの文豪ウエンデル・ベリールが「食べる喜び」というエッセーのなかで述べている言葉です。食べ物の向こう側に農業や土地が浮かんでくる、そんな想像・理解ができた時、喜びを感じるようになります。厚木市とその周辺には、農業との結びつきを実感できる食べ物がたくさんあります。例えば、B-1グランプリ優勝で

一気に全国区になったシロコホ・ホルモン、40年間続く地産地消の実践の場厚木市民朝市の農産物、地元で小麦を栽培し石臼で挽いてつくる香り高き

湘南小麦パン、全国生産の8割を占める食べる八重桜・桜花漬はあんなのへそとなる等々。卒業まで4年間、厚木にしっかりと根をおろし、あなた自身の「食べる喜び」をたくさん見つけてください。入学おめでとうございます。

## 身を律した学生生活を

オホーツクキャンパス学生部長 吉田 穂積



皆さんは、広大な自然と豊かな生物資源に溢れる網走という地でこれから始まる学生生活に対する期待と不安が胸の内を渦巻いていることだと思います。時にはこれまでも経験したことのないような自然の厳しさに驚くこともあると思いますが、安心してくださいますか、あな

皆さんは、広大な自然と豊かな生物資源に溢れる網走という地でこれから始まる学生生活に対する期待と不安が胸の内を渦巻いていることだと思います。時にはこれまでも経験したことのないような自然の厳しさに驚くこともあると思いますが、安心してくださいますか、あなたを暖かく包んでくれる地域の方々や先輩たちが待っています。



自然や食に感動するのは世界共通

## 6次産業化と地域人材

生物産業学部長 黒瀧 秀久



昨年は本学部の付属施設である寒冷地農場の30周年と学部創設25周年を迎える記念の年であった。本学部では社会人講座・ホーソックものづくり・ビジネス地域創成塾を開講し、地域資源の高付加価値化を行うための人材

この地域は農林水産業の中心的作用を担う、食料生産基地でありながら資源への高付加価値化は進んでおらず、安価に域外への資源供給が行われてきた。しかし今後は

地域資源を大切に、高付加価値化や機能性を評価する地域産業の新たな活性化戦略が必要となる。こうした中で女性陣の活躍が目立つものがある。女性の視点から見て、自

はなないだろう。東京の催事に商品を出展しての受賞や、大手デパートからの商談が実現した人もいます。

現在は網走市と共同で創生塾事業を行っており100人を超える修了生は今後地域貢献を担ってくれるに違いない。本プロジェクト開始から10年目を迎えたが、アベノミクスの「地域創生」を先取りした創成塾の成果が、地域活性化につながりその息吹に浸透していくことを願っている。

これから大学生活を豊かにするために、まず皆さん一人一人が社会の一員である自覚を持つてください。そして、自立した人間として学生生活において受けるべき「教わる」という態度から自ら動く「学ぶ」の姿勢になり、自分に厳しく行動することを心がけて

## 厚木学生会館 今秋完成予定

厚木キャンパス学生会館新築工事の建設が今年9月の完成に向け、着々と進んでいる。本建物の概要は鉄骨造地下1階地上4階建て、延べ床



完成イメージ図

建物のコンセプトは、農の舞台Ⅱ、NOU、BUTAIをキーワードに、学生の活動ステージを農の舞台Ⅱに見立て、「アグリラウンジ」、「アグリキッチン」、「アグリテラス」、「アグリ広場」という要素を取り入れた施設構成となっている。厚木キャンパスにおける学生課外活動の新拠点として、にぎわいが期待される。

「食と農」の博物館は開館11年目を迎える。十年一昔という昔という字が入っているから、10年前とはちょっとした「昔」なのだろう。当博物館もその10年の間、66もの企画展示を送り出してきた。小さな企画展示を含めると更にその数は増えてくる。

昨年度は当博物館としては初めての試みであった、民俗学的視点での企画展示「農と折り紙」の馬「神の馬」展(3月28日・9月15日)を世に問うた。展示空間のデザインに専門のデザイナーの参加を得たのも初めてであった。「農と折り紙」展が過去から現在の「農」への日本人の想いを表したものとすれば、次の「バイオミメティクスを超えて」昆虫などの生き物や自然に学ぶものづくり展(10月1日・2015年3月15日)は未来の「農」の可能性を探るものであった。このように1年を通して一貫したテーマで企画展示を発表したのもまた初めてのことであった。

今年度は「ふたつの教育研究の世界」をテーマに学術情報課程に「生物科学部」のふたつの教育研究部を紹介する展が、次に「女と自然」とかかわり「農を支えた北東北の布たち」展を開催する。今年も「食と農」を根幹とした大きな新施設をバックボーンに面白い活動ができてきた。ぜひ「食と農」の博物館を注目していただきたい。

## 「食と農」の博物館だより

の昼食は、イスラム教で禁じられている豚肉やアルコール類などを一切使わないアサリの味噌汁や天ぷらなど「ハラル和食膳」で留学生をおもてなし。初めて味噌汁を飲んだ留学生もおり、驚きと喜びの楽しいひと時を過ごした。食事後には展望台一角でメッカへ向けて礼拝を行った。

芦ノ湖周辺の自然と富士山の絶景を満喫し、伊豆・箱根を通して日本の自然、歴史、食を堪能した(国際協力センター)

## ムスリム留学生「おもてなし」箱根ハスツアー

2月、ムスリム外国人留学生を対象に箱根エリアバスツアーを行い、インドネシア人、アフガニスタン人留学生計19人が参加した。

十国峠レストハウスで

### 先端研究プロジェクト 10周年シンポジウム開催

本学の学術活動を支援する総合研究所では、先端研究プロジェクトを企画・運用している。独自の先端的な研究を対象とし、本学の研究基盤の向上、また新たな分野への挑戦をはかることが目的である。10周年を迎えるにあたり、今までの



会場は多くの大学院生・学部生でにぎわった

採択課題を振り返り、今後のさらなる先端研究の展開に結びつけるため、昨年12月記念シンポジウムを開催した。研究代表者による発表は、生物学、化学、生態学と幅広い研究分野にわたり、また研究組織も世田谷、厚木、オホーツクと全学的に行われてきたことをあらためて知ることができた。そして、本プロジェクトが、その後の研究の進捗、展開に大きく役立ったことも報告された。

また、国立遺伝学研究所所長の桂勲先生に「研究の論理・科学論文

の論理と研究現場の論理」と題して特別講演をいただいた。得られたすばらしい成果を、海外の研究者にもいかに伝えるか、研究の方向性をどのように見つけ出すのか、普段聞くことのできない非常に貴重なお話しを伺うことができた。

東京農大における幅広い研究を知ってもらい、本学でできることの再発見、研究への新たな関心かど期待している。

#### 富岡市と連携協定

総合研究所 先端研究部長 矢嶋俊介

本学は昨年12月22日、群馬県富岡市と連携協定を締結。学生のフィール



夏秋啓子副学長と Myo Kywe 総長

ドワークの場を創出するとともに、同市は富岡製糸場世界遺産登録決定を受け地域活性化へ向けた古民家・里山・桑畑・養蚕の再生活動などを考案中。農学科長島孝行教授は同市富岡シルクブランド協議会顧問としても活動している。

#### イエジン農科大とも

本学は2月20日、イエジン農科大学(ミャンマー連邦協和国イエジン

市)と学術協定を締結。同大は1924年にマシナレー市に設立された Agricultural College and Research Institute を前身とし、1997年にイエジン農科大学として再編された農業灌漑省に属する農業関連の人材を育成するミャンマー唯一の農業高等教育機関。大

学本部イエジンキャンパスと7つのサテライトキャンパスを合わせて基礎教育4学科と専門9学科(農学、農芸化学、農業経済、工学、動物学、園芸学、植物病理学など)を有する。本協定により、学生、教職員の交流、共同研究などの進展が期待される。10月に本学で開催する世界学生サミットを皮切りに交流は本格化する。

#### 茨城県行方市と

茨城県行方市と1月12日、包括連携協定を締結。鈴木周也市長は食品科学科2期生、卒業後JA職員として勤務、その後行方市は60種類の農産物を生産しており首都圏への出荷が中心。

本協定により地域資源を活用した6次産業化と人材育成及び商品開発、販路拡大、地域再生・活性化に寄与する人材育成、都市と地域の交流事業などの課題に取り組み。

支援体制を目的に設立されたベンチャー企業。自産自消を掲げ、新たな農業モデルと人づくりを目指す。世田谷経営室に「八百屋マイファーマー」をオンライン学生インターンシップの場所としても活用が期待される。

茨城県行方市と1月12日、包括連携協定を締結。鈴木周也市長は食品科学科2期生、卒業後JA職員として勤務、その後行方市は60種類の農産物を生産しており首都圏への出荷が中心。

福島県南相馬市民情報交流センターで2月19日、森林総合科学科のプロジェクトチーム(上原巖・中村幸人・橋隆一・江口文陽・瀬山智子・大江宏也)が2012、14年度まで継続調査を行ってきた同市の山林における放射能測定の結果について報告会を開催した。

クリの木の雄花を採集している様子

### 活躍する卒業生

#### 悔いのない4年間を!

東京農業大学入試センター事務局

事務職員 吉田 彩乃

私は現在世田谷キャンパス入試センター事務局に所属しており、入試の準備運営や、高校生に東京農大を知ってもらうための広報活動を行っています。

私は北海道江別市出身で、地元北海道の「食」について学ぶためオホーツクキャンパスや高校での進学説明会では、大学での学びの内容や特徴などその魅力を伝える役割を担って



ツクキャンパスの食品香粧学科に入学しました。オホーツクで過ごした4年間では、授業や実験・実習で学んだ専門的な知識を生かして実験を行うことで理解を深められるおもしろさや、農家や漁業のアルバイトを通じて知り合った人々とのつながりの大切さを実感することができました。

多くの学生に悔いなく有意義に過ごし卒業してほしいという思いから、母校である東京農大職員の道を選びました。受験生に向けて話す時はいつも、自分が実際に感じたことや学んだことを伝えられるように心がけています。

大学4年間は、自分のやる気次第でさまざまなことに挑戦することができ、自分の努力次第で何倍にも成長することができると実感しています。この4年間を一人でも多

いきたいと思います。

#### オホーツクから発信

生物産業学部取り組み

佐賀大農学部、韓国3大学と

佐賀大学農学部、忠北大学校(忠清北道清州市)、韓国農水産大

農学部は矢吹町と

農学部と福島県矢吹町は地域活性化と教育研究の推進を目的に昨年12月



無料配布された矢吹米

19日、連携協定を締結。米の産地として有名な矢吹町は、国の厳しい出荷基準の検査のもと安全な米を出荷している。

厚木、世田谷キャンパスでは無料配布キャンペーンを実施し、試食した学生は「米の味が濃厚」「とてもおいしい」と大感況であった。

今後、福島における調査研究、支援活動、森林における放射性降下物質の動態の解明を継続し、保育方法、再生手法を考

福島県南相馬市民情報交流センターで2月19日、森林総合科学科のプロジェクトチーム(上原巖・中村幸人・橋隆一・江口文陽・瀬山智子・大江宏也)が2012、14年度まで継続調査を行ってきた同市の山林における放射能測定の結果について報告会を開催した。

福島県南相馬市民情報交流センターで2月19日、森林総合科学科のプロジェクトチーム(上原巖・中村幸人・橋隆一・江口文陽・瀬山智子・大江宏也)が2012、14年度まで継続調査を行ってきた同市の山林における放射能測定の結果について報告会を開催した。

教授 上原巖

